

## 『ヴェニスの商人』における Venture について

小 野 昌

『ヴェニスの商人』と聞けばまず、あの高利貸のシャイロック (Shylock) の出る芝居かと言われるほど、この劇における彼の存在は現代の我々にとっては大きなものがある。彼を悲劇の主人公でもあるかのような扱い方をする上演がイギリスにおいても、日本でも行なわれている。それとは逆に、彼を徹底的に喜劇の悪玉にしてしまう解釈も伝統的に行なわれている。いずれにしても話題はいつもシャイロックに向きがちで、主人公であるはずの、ヴェニスの商人、アントニオウ (Antonio) の影は増々うすくなって、シャイロックに主人公の座を奪われている状態である。

なぜこのようにアントニオウには存在感が欠けているのか。その原因はシェイクスピアの芝居の作り方にあるのだろうか。それともエリザベス朝時代の考え方と現代人との違いにあるのだろうか。この劇は他のシェイクスピア喜劇と異なって非常に現実的な社会の状況が描かれている。それはいつの時代においてもこの世の中で最も現実的なもの、つまり金銭についての話がいつも付きまどっているからである<sup>1)</sup>。

バッサーニオウ (Bassanio) は自分の借金を返済するために、莫大な遺産を相続したベルモント (Belmont) のポーシア (Portia) に求婚することにする。その費用を捻出するために友人のアントニオウに3000ダカットの借金をする。アントニオウは当面、金のあてがなく、シャイロックに金を借りる。シャイロックはそれをチューバル (Tubal) に融通してもらうことになっている。さらにその金に対する利息の問題がからんでくる。

シャイロックの娘、ジェシカ (Jessica) は恋人のロレンゾウ (Lorenzo) と駆落ちする時に、父親の金や宝石をごっそり持出す。このような現実的な行為の行なわれているヴェニスとは対照的な所として描かれているベルモントのポーシアもアントニオウの危機を救うために、借金の3000ダカットの何十倍でも出そうと金での解決を提案する。

このような金銭の問題にみられるように、この劇には余りに現代に通じるものがあるために、ともすれば現代のモラルで判断しがちである。特にアントニオウがシャイロックを非難する根拠となっている利息の問題などは、現代では余りに当然の商行為であり、特に彼を悪人として考えようとすれば、それは彼が法律 (証文) に名を借りた合法的な殺人を行なおうとしたことだけになってしまう。そうすると、彼を取引所で罵倒したり、つばをはきかけたりしたり、さらに法廷でキリスト教徒に改宗をさせたアントニオウの方にもかなりの非があることになってしまう。従って、シャイロックの言う、キリスト教徒のやることを手本にして、それを忠実に実行するのだとする復讐の論理の方が断然説得力を持つことになる。

このように余りに現代のモラルにあてはめて考え過ぎると、この芝居の前提そのものを崩しかねない危険性がある。シェイクスピアの喜劇の主人公は基本的には善人であるのが前提であり、従ってこの劇の主人公はあくまでアントニオウであり、シャイロックは悪玉であるとする伝統的な喜劇の枠の中で考えようとすれば、利息を取ることを悪として認めること以外に、さらに別の視点を持たなければならないのではないだろうか。そうでなければこの劇は登場人物の比重に大きくバランスを欠いたものになり、喜劇の枠をはみ出してしまいそうになるのである。

そこで単に現代流の道徳律に照らして考えるのではなく、新たな視点として、エリザベス朝時代の *venture* (この具体的な意味については後述する) に対する考え方を検討してみる必要があるのではないだろうか。*venture* を善きこと、賞賛すべきことであるとする見方がこの劇の大前提としてあるように思われる。こうした視点に立って考えるならば、これは立派に喜劇として成立し、ア

アントニオウは主人公の資格を十分に持ち、シャイロックはやはり葬り去られなければならない存在となる。そして「人肉裁判」とならんでもう一つの大きなエピソードである「箱選び」についても、シェイクスピアが単に昔からあった話を挿入したというだけでなく、これには明確な意味があり、この劇の重要なテーマと有機的に結びついていることが理解できるのではないだろうか。

## I

*The Merchant of Venice* は『ヴェニス商人』と翻訳されて通用しているが、merchant を「商人」と訳してしまうと、かなり語感が違ってくる。ここで言う merchant は船で海外と取引をしていた貿易商のことである<sup>2)</sup>。当時このような貿易商は“Merchant Adventurers”，または“Merchant Ventures”とよばれていた<sup>3)</sup>。この商人達のイギリスにおける最大の中心地は、シェイクスピアが生まれ、青年時代を過ごした、ストラトフォード・オン・エイボン (Stratford-on-Avon) の町を流れるエイボン河の河口にあるブリストル (Bristol) の町であった<sup>4)</sup>。彼等の活躍の様子を若きシェイクスピアがたえず耳にしたり、あるいは直接見たりしたであろうことは想像に難くない。海外貿易の重要性が増すにつれて、こうした商人達の社会的地位も極めて高いものとなり、聖聖者や法律家の地位にも劣らない位のものになっていた<sup>5)</sup>。

彼等の商売につきものなのが risk であった。この risk をおかすことによって、巨額の利益をあげることができたであろうし、又反面、一朝にして全財産を、時には生命までも失うことがあったことであろう。

A venture (adventure, aventure, or aunter, in Middle English) was a risk. To venture was to take a chance, to hazard one's life or one's goods in an enterprise that might bring a worthwhile reward.<sup>6)</sup>

この venture の精神がこの劇の中でどのように発揮されているか考えることにしたい。もちろんアントニオウは「ブリストルの商人」でもなければ「ロンドンの商人」でもない。舞台はイタリアのヴェニスであるがシェイクス

ピアが必ずしも彼をイタリア人として扱っていると考えする必要はない。当時実際にイギリスにも「ヴェニス商人」は数多く活躍してはいたが、作者のイメージの中にあっただのはむしろイギリス人の商人達であったと考える方が自然なのではないだろうか<sup>7)</sup>。そしてアントニオウを「ヴェニス商人」とし、舞台をヴェニスにすることによって、この金にまつわる現実的な話のリアリティーを多少ともやわらげることになったことであろう。ローレンス、ダンソンの言うように、エリザベス朝の人達にとって、「ヴェニス商人」は限らずとも好ましい印象を与えているものとは言えなかったようである。

Elizabethan attitudes towards the idea of a “merchant of Venice” were complex, compounded in part of admiration, in part of jealousy, but also in part of moral disapproval.<sup>8)</sup>

しかしだからと言って、この venture の精神までも否定されていたわけではないであろう。1幕1場の最初の場面で、メランコリーに陥ちいつているアントニオウをなぐさめている友人のサリーリオウ (Salerio) の台詞には、Merchant Venturer に対する賞賛の気持が巧みに表現されているとみることができる。

Your mind is tossing on the ocean,  
 There where your argosies with portly sail,  
 Like signiors and rich burghers on the flood,  
 Or as it were the pageants of the sea,  
 Do overpeer the petty traffickers  
 That cur'sy to them (do them reverence)  
 As they fly by them with their woven wings.

(I. i. 8—14)<sup>9)</sup>

## II

それではこの venture の精神が具体的にこの作品の中でどのように扱われ、登場人物のそれぞれにどのような形で反映されているのか検討してみることにはしたい。まずアントニオウから考えてみよう。彼が職業上 venture をしている

ことは明らかである。Merchant Adventurer が常に生命と財産を危険にさらしていなければならないことは先に述べたが、シャイロックはアントニオウを保証人として厳しく査定しながら海外との貿易の危険性について次のように言う。

... but ships are but boards, sailors but men, there be land-rats, and water-rats, and land-thieves, water-thieves, (I mean pirates), and then there is the peril of waters, winds, and rocks.

(I. iii. 19—23)

このような職業上の venture に加えて、この劇の最大の見せ場とも言うべき「人肉裁判」の発端となる venture をやってのける。バッサーニオウとの友情のために彼は自分の体の肉 1 ポンドを担保にしてシャイロックから金を借りるのである。ここで重要な点は彼が金銭的な利益のためではなく、そして恋のためでもなく、友情のために venture を行なったということである。この時代においてはドーヴァー・ウィルソンが述べているように、友情が恋愛よりも優位をしめる考え方があるからである<sup>10)</sup>。正にこの行為は venture (to hazard one's life) の意味を文字通りに実行することに他ならない。その意味において、この劇のモラルの点からみるならば、やはり彼が最も高いものを示していると言わざるを得ない。「人肉裁判」は変装したポーシアの判決により勝利をおさめ、難破したと伝えられていた船は無事もどってくることになる。こうして自分の命を賭けることによって彼は商売上の venture にも、友情のための venture にも共に成功することができたのである。

アントニオウのもう一つの問題として、彼のメランコリーの問題がある<sup>11)</sup>。なぜ彼は自分でも原因のわからない塞の虫にとりつかれているのだろうか。

In sooth I know not why I am so sad,  
It wearies me, you say it wearies you;  
But how I caught it, found it, or came by it,  
What stuff 'tis made of, whereof it is born,

I am to learn.

(I. i. 1—5)

この開幕を告げるアントニオウのメランコリーは最終的に解決されたのだろうか。この生活に何の不安もない男のメランコリーの原因は、一見矛盾するようであるがその不安のなさにあるように思われる。Merchant Venturer としては余りに risk の少ない商売をしているからではないだろうか。

My ventures are not in one bottom trusted,  
Nor to one place; nor in my whole estate  
Upon the fortune of this present year.

(I. i. 42—44)

彼は自分自身が船に乗って海外に出かけるようなタイプの商人ではない。従って少なくとも直接的な生命の危険があるわけではない。さらに多数の船を分散させてより危険の少ない商売をしている。こうした安全の上に立って行なっている、単に金を得るためだけの商売に、自分でも気づかないうちに嫌気がさしていたのではないだろうか。けれどもバッサーニオウとの友情のために、文字通り自分の体を risk にさらした真の venture を行なうことによって、彼のメランコリーは解消し、5幕では喜劇の輪の中に入ることができたのではないだろうか。

シェイクスピア喜劇の結末は結婚によって終ることが多い。この劇においてもバッサーニオウとポーシア、グラシアーソウとネリッサ、そしてロレンゾウとジェシカの3組の結婚で終わりをつける。1人アントニオウだけがこの枠から取り残されている。けれども彼は恋愛以上のもの、すなわち最高の友情を示すことに成功したのである。

### III

シャイロックについてはどうであろうか。高利貸という商売が世間であまり歓迎されない商売であることは今も昔も変わりはないが、イギリスにおいては

中世以来、宗教的な理由によって利息を取ることは禁じられていた。しかし1571年、議会によって10%を越えない利息は認められていた。それ以前にも1545年に認められてはいたが、1552年に廃止されている。一度廃止された法律がなぜ再び認められるようになったのか。それは社会の現実の動きに合わなかったからである。現実には10%以上の高利が横行し、かえって弊害が増したからであった<sup>12)</sup>。このように利息は合法的になり、現実に行なわれていたとしても、人々は長い間の宗教的感覚から利息を取ることに對して、また金貸しに對する嫌悪感を持っていたのではないだろうか。そうした心理的な葛藤はシャイロックを非難しているアントニオ自身が、現実には彼から金を借りなければならなくなっていることに如実に現われているのである。そこでこの問題だけで彼を決定的に悪玉にしてしまうことは不可能ではないだろうか。

それではこれまでみてきた venture の立場から彼をながめてみるとどうなるのであろうか。金を貸りに来たバッサーニオウに彼は次のように答える。

Shy. Three thousand ducats for three monts, and Antonio bound.

Bass. Your answer to that.

Shy. Antonio is a good man.

Bass. Have you heard any imputation to the contrary?

Shy. Ho no, no, no: my meaning in saying he is a good man, is to have you understand me that he is sufficient,  
— yet his means are in supposition.

(I. iii. 8—15)

彼は“good man”を道徳的な意味での善良な人ではなく、あくまでも保証人として資力があり、あてになる人という意味に解釈している。次に続くアントニオとの会話で旧約聖書のヤコブ (Jacob) の利殖の方法をもち出して、盗んで金もうけをしなければ神の祝福が受けられると、金利を取ることを正当化しようとするが、アントニオにそれは、“This was a venture, sir, that Jacob serv'd for”とたしなめられる。この場合の venture は「投機」の意味であろう。彼の利殖の方法は、まず risk を伴わないこと、安全であることが最優先する極めて現実的な方法である。さらにその安全を確実なものにするために証

文を取る。この bondこそ彼の安全を絶対的に確実なものにすると思っている。それ以外の精神的な要素はすべて排除して考えている。

この契約を絶対視する生活態度は現代の我々と大変によく似ているので、これも我々が彼を villain とは必ずしも扱いにくくする要素の一つになっている。肉1ポンドを担保にした人殺しを前提にした契約は結局破局をむかえなければならぬのである<sup>13)</sup>。ヴェニスの法律もこの契約には一時は勝てないのではないかと思われる。宗教的な慈悲の精神はここでは通用しないのである。彼にとっての正義は bond を忠実に履行することにあるのだ。この契約の原理を打ち負かしたのは、やはりその契約自体の持っている矛盾によってであった。余りに証文を絶対視していた彼は、結局その証文そのものに裏切られることになるのである。これは Macbeth の最後と驚くほどよく似ている。Macbeth も魔女達の予言を確信して決して自分は負けることはないと思っていた。けれども彼が頑なにしがみついていた予言は魔女の equivocation (二枚舌) であった<sup>14)</sup>。肉は切り取っても良いが、血は一滴たりとも流してはならないというポーシアの判決は最高の equivocation であると考えることができる。

Shy. Is that the law?

Por.

Thyself shalt see the act:

For as thou urgest justice, be assur'd

Thou shalt have justice more than thou desir'st.

(IV. i. 309—312)

法の絶対性に完全に保証されていると考えていた彼は、その同じ法によって裁かれるのである。たとえ秤の皿が髪の毛一筋ほど傾いたとしても、同じ法の名のもとに彼に死刑、財産の没収が行なわれるのである。守られているものとはばかり考えていた法律は今度は牙をむいて襲いかかってくる。キリスト教徒になることを条件に命だけは助けてもらえることになったシャイロックは次のように言う<sup>15)</sup>。

Nay, take my life and all, pardon not that,—

You take my house, when you do take the prop



That doth sustain my house: you take my life  
When you do take the means whereby I live.

(IV. i. 370—373)

助けられた命も彼にとっては意味がない。ことここに至っても金が最高の価値をもっているのである。財産を没収されることは命を取られるのに等しい。財産が彼には命なのであるから<sup>16)</sup>。

このようにシャイロックの venture に対する態度は単に金を得るための「投機」に限定されている。しかも安全を第一にしたものであって、venture の持つもう一つの側面である生命や財産を危険にさらすという面は全く欠けているのである。これでは真の venture とは言い難い。この点において彼はアントニオウとは全く対照的な人物となっている。こうした欠点を持ちながら彼がこの劇の中で最も強烈な個性と迫力を持ち、その明確な性格は大きな魅力となっていることには変わりはない。それがともすると喜劇の粹をつき破り混乱を引き起こすのである。彼の台詞は全体としてそれほど多いものではない。5幕には全く登場することはない。けれども彼の台詞の一つ一つが余りに効果的に用いられているために、そしてレトリックの巧みさによって、いつしか喜劇の悪玉の役割を越えてしまっ、悲劇の主人公のような彼の姿を見てしまうのだが、これはシェイクスピアの計算違いであったのかもしれない<sup>17)</sup>。

#### IV

ポーシアはなぜバッサーニオウのような男が好きになるのだろうか。彼の魅力は何なのだろうか。登場するなり “Good signiors both when shall we laugh?” という。メランコリックな登場のしかたをするアントニオウとは好対照となっている。彼の関心事は派手な暮らしで背負いこんだ借金をどうするかである。この借金の返済のためにポーシアに求婚しようとするのである。

In Belmont is a lady richly left,  
And she is fair, and (fairer than that word),  
Of wondrous virtues,—sometimes from her eyes

I did receive fair speechless messages:  
 Her name is Portia, nothing undervalu'd  
 To Cato's daughter, Brutus' Portia,  
 Nor is the wide world ignorant of her worth,  
 For the four winds blow in from every coast  
 Renowned suitors.

(I. i. 161—169)

まず多額の遺産を相続したこと、次に美人であるという順序になる。そして世界のいたる所から求婚者達が航海をしてやってくる<sup>18)</sup>。バッサーニオウの、現代人にとってはいささか功利的とも思われる結婚の動機もエリザベス朝の人々にとってはごくありふれた典型的なことであった<sup>19)</sup>。そしてベルモントまで求婚しに行く費用をさらにアントニオウに借金をしようとするのだ。この二重に借金を重ねることをなくした矢を見つけるために、もう一度矢を飛ばしてみることにたとえている。

In my school-days, when I had lost one shaft,  
 I shot his fellow of the self-same flight  
 The self-same way, with more advised watch  
 To find the other forth, and by adventuring both,  
 I oft found both.

(I. i. 140—144)

両方とも失うかもしれない危険を冒してやってみることに、これは明らかに *venture* の精神である。実際彼は両方とも（ポーシアも金も）手に入れることができたのである。

さらに「箱選び」の場面はこの *venture* の精神を極めて象徴的な形で表現していると考えられる。「金」、「銀」、「鉛」の箱のどれかに入っているポーシアの絵姿を求めて、モロッコ王 (The Prince of Morocco), アラゴン王 (The Prince of Arragon), そしてバッサーニオウが挑戦するのだが、箱選びをする前に条件がつけられている。どの箱を選んだか他言しないこと。王しい箱を選びそこなったら生涯、二度と再びどのような娘にも決して結婚の申し込みをしないこ

と。箱選びに失敗したらただちに彼女のもとから去ることである。

To these injunctions every one doth swear  
That comes to hazard for my worthless self.

(II. ix. 17—18)

ポーシアはこの箱選びを hazard (賭け) という表現を用いている。ここで用いられている hazard は venture と同義語である<sup>20)</sup>。さらに3幕2場でバッサーニオウが箱を選ぶことになると、失敗して彼を失うことを恐れて、

I pray you tarry, pause a day or two  
Before you hazard, for in choosing wrong  
I lose your company.

(III. ii. 1—3)

と言う。このように箱選びには命にはかかわらないものの、かなり大きな risk を伴い、選ばれるポーシア自身が venture と認めているのである。

外観が全く中身を示さないことがあると考えて、バッサーニオウが選ぶ鉛の箱には次のような文句が記されている<sup>21)</sup>。

“Who chooseth me, must give hazard all he hath.”

おのれが持てるものすべてを投げうって危険にさらすことこそ、venture の精神に他ならないのではないか。危険を顧みず、自己の全存在をかけて挑戦してみることによって求めるものを得ることができる。この一見たわいの無さそうに見える「箱選び」のエピソードの中に、この喜劇全体に共通しているテーマが示されているのではないだろうか。バッサーニオウはおのれの持つものすべてを投げうって、二重の借金に身をさらして、ポーシアを獲得したのである。

## V

選ばれる側のポーシアはどうなるのであろうか。彼女にとっては、この選ばれるという受身の状態が問題になっているのである。彼女には venture の機会

は与えられていないのだ。

By my truth Nerissa, my little body is weary of this  
great world.

(I. ii. 1—2)

このポーシアの最初の台詞は1幕1場のアントニオウの台詞と対をなし、彼女もメランコリーになっている。そして、その原因が“O me the word ‘choose’! I may neither choose whom I would, nor refuse whom I dislike.”であることがわかる。自分の意志を働かせることができず、夫を死んだ父親の意志によって束縛され、「箱選び」の形でしか夫を決めることができないことを嘆いている。この“great world”で自由に venture の精神を発揮できないことが彼女のメランコリーの原因なのである。

こうして受身の状態を嘆いているポーシアではあるが、バッサーニオウが箱を選ぶことになると急に積極性を発揮しはじめ、彼に対する恋心を打ち明ける。

I would detain you here some month or two  
Before you venture for me.

(III. ii. 9—10)

基本的には受身の状況の中にあっても、その限られた範囲の中で彼女の積極性は増して行く。どの箱を選んだら良いのかは教えられないと言いながら間接的に歌に託して、ポーアの絵姿が入っているのは鉛の箱であることを教えているのである<sup>22)</sup>。この積極性は、「人肉裁判」の行なわれる法廷の場において最高潮に達するが、そこでは変装して男になることによって、女であることの慎しみをなくしてさらに行動の自由を獲得することができるのである。そうすることによってバッサーニオウを助け、友情のために最大の venture をしたアントニオウの命を救うことができたのである。

ポーシアは夫となったバッサーニオウに、自分の持てるものすべてを捧げ、それに加えて指輪をさし出す。

Por. I give them with this ring,  
Which when you part from, lose, or give away,  
Let it presage the ruin of your love,  
And be my vantage to exclaim on you.

Bass. . . . but when this ring  
Parts from this finger, then parts life from hence,—  
O then be bold to say Bassanio's dead!

(III. ii. 171—174, 183—185)

このいささか誇張された約束はバッサニーオウが男装したポーシアにこの指輪を与えてしまったことによって破られ、さらにグラシアーノウとネリッサとのこれと同様の約束もこれまた破られる。この約束の履行をポーシアはきびしく迫るのであるが、これは彼女が自分をシャイロックに見立て、「人肉裁判」のパロディをしていると考えられる。バッサニーオウとのこの約束は、シャイロックの証文と明らかに対比されている<sup>23)</sup>。

ロレンゾウとジェシカ（ヘブライ語で、a spy, looker-out の意）の場合をみると、この恋人達は他のカップルとは多少異なったムードを持っている<sup>24)</sup>。シャイロックの娘であるジェシカの場合はシャイロックをどう評価するかによって見方が大きく変わってくる。けれども、いずれにしても彼女はロレンゾウと駈落ちするために父親の金や宝石を持出し、さらに亡き母親のレア (Leah) の指輪を猿と取り替えたりしている。そしてロレンゾウも没収されたシャイロックの財産の半分をジェシカと一緒に譲渡されることになる。このように彼等は何んの venture もすることなく結婚し、しかも巨額の財産を譲り受けることになる。このような彼等にはこれまで検討してきた venture の精神とは全く関係の無いように見える。けれどジェシカにはより大きなものを得ようとすれば何かを賭けなければならないとする意識は持っているのだ。ポーシアが立派な女であることをほめたたえる場面で彼女は次のような言い方をする。

Why, if two gods should play some heavenly match,  
And on the wager lay two earthly women,  
And Portia one, there must be something else

Pawn'd with the other, for the poor rude world  
Hath not her follow.

(III. v. 73—77)

この場合の pawn の意味は Onions によれば “to stake, wager, risk” である<sup>25)</sup>。このような意識はありながらも彼女が実際にやっていることとは大きくかけ離れている。5幕1場の彼等の恋のデュエットが悲劇的な調子を帯び、美しい音楽を聴いて悲しくなる彼女には、自分達の行動に対する後悔の念があるのではないだろうか<sup>26)</sup>。

Lor. Such harmony is in immortal souls,  
But whilst this muddy vesture of decay  
Doth grossly close it in, we cannot hear it…

Jes. I am never merry when I hear sweet music.

(V. i. 63—65, 69)

ロレンゾウがシャイロックの家から彼女を連れ去る時、彼女を男装させ、自分は masque を付けていたのはそんな彼等の後ろめたさを隠すためでもあったかもしれない<sup>27)</sup>。

## VI

この『ヴェニスの商人』という、喜劇としてはいささか複雑すぎるテーマが入りこんでいる劇を、venture という語に含まれる様々なレベルの意味を手がかりにして、多少単純化して検討してみたわけであるが、もちろんこれだけでこの劇の持つ複雑な意味が解明されるわけではない。他の道徳律、例えば友情、慈悲、キリスト教徒の正義などの問題に対する作者の扱い方には必ずしも文字通りに受けとれず、風刺的に解釈できる面が多分にある<sup>28)</sup>。けれどもこうして venture の視点からこの劇をながめてみるとシェクスピアが意識的であったかどうかは別にしてもこの venture に対して全く肯定的な見方をしていると言えるのではないだろうか。

イギリスが外に向かって大きく発展を遂げようとしている16世紀も押し詰ま

った時期に書かれたこの喜劇の中で、意識的、無意識的にもこの venture の精神は積極的に評価されていたと見ることができる。そうした雰囲気シェイクスピアは、ヴェニスとベルモントを舞台としたこの劇の中に織り込んでいったのだと考えられるのである。

## 注

- 1) Max Plowman, *Money and 'The Merchant'* (1931) ed. by John Wilders, London, Macmillan, 1977, pp. 77—78.
- 2) *O. E. D.* によると merchant は A. 1. に "...from an early period restricted to wholesale traders, and esp. to those having dealing with foreign countries" とあり, Alexander Schmidt, *A Shakespeare Lexicon* には, 1) "one who traffics to foreign countries" となっている。
- 3) E. M. Carus-Wilson, *Medieval Merchant Ventures*, London, University Paperbacks, 1967, p. XVI.
- 4) *Ibid.*, pp. 1—3.
- 5) *Ibid.*, p. xxvii.
- 6) *Ibid.*, p. xvi.
- 7) *Ibid.*, pp. xxviii—xxix.
- 8) Lawrence Danson, *The Harmonies of The Merchant of Venice*, New Haven and London, Yale University Press, 1978, p. 25.
- 9) 以下本文の行数, 役名は The Arden Shakespeare 版による。
- 10) このことは3幕4場のロレンゾーとポーシャの議論でも示されている。Cf. John Dover Wilson, *The Merchant of Venice*, The New Shakespeare, London, Cambridge U. P., 1973, p. 156.
- 11) Furness の Variorum edition にはアントニオのメランコリーについての諸説が紹介されているが, 定説となるものは無い。Horace Howard Furness, *A NEW VARIORUM EDITION of Shakespeare, The Merchant of Venice*, New York, American Scholar Publication, 1965, pp. 2—3.
- 12) Danson, *op. cit.*, p. 144.
- 13) エリザベス朝時代の貴族たちの多くは膨大な借金をかかえており, この危険な担保のメタファーは必ずしく全く相入れないものではなかったようである。Cf. Danson, *op. cit.*, pp. 145—146. E. C. Perret, *The Merchant of Venice and the problem of usury* (1945) ed. by John Wilders, London, Macmillan, 1977, pp. 101—102.

- 14) Macbeth の equivocation の問題については拙稿『マクベスの意識構造—「運命」「眠り」「時』(城西人文研究, 第6号)を参照されたい。
- 15) 法律で改宗させることは現代人にとっては奇妙に感じられるが, エリザベス朝の人々にとってはこれも慈悲の行為であったと考えられる。cf. Larry S. Champion, *The Evolution of Shakespeare's Comedy*, U. S. A., A Harvard Paperback, 1973, p. 65.
- 16) Pettet, op. cit., p. 112.
- 17) シャイロックの “Hath not a Jew eyes,” などのレトリックの問題については Pettet, op. cit., pp. 104—110を参照。
- 18) この台詞にはポーシアに求婚するためには長い航海が必要であることが示されている。
- 19) Pettet, op. cit., pp. 105—106.
- 20) Schmidt, op. cit., hazard の項参照。3幕2場10行目ではバッサーニオに対して “Before you venture for me.” と言っている。
- 21) この劇における appearance と reality の問題を Tucker はシャイロックの証文の条文との関連において論じている。cf. E. F. J. Tucker, *The letter of the law in 'The Merchant of Venice'*, Shakespeare Survey vol. 29, Cambridge U. P., 1976, pp. 93—101.
- 22) 三箇の箱を前にして思案しているバッサーニオウの前で次の歌がうたわれる。
- Tell me where is Fancy bred,  
Or in the heart, or in the head?  
How begot, how nourished? (III. ii. 63—65)
- bred, head, nourished と韻をふんで lead を連想させる。
- 23) Peter G. Phialas, *Shakespeare's Romantic Comedies*, North Carolina U. P., 1966, p. 145.
- 24) Furness, op. cit., p. xi.
- 25) C. T. Onions, *A Shakespeare Glossary*, Oxford U. P., 1953, pawn の項参照。
- 26) Alexander Laggatt, *Shakespeare's Comedy of Love*, Methuen, London, 1974, p. 144.
- 27) C. L. Barber, *Shakespeare's Festive Comedy*, Princeton, Princeton U. P., 1972, p. 165.
- 28) Lawrence Danson, op. cit., pp. 3—5.